

ルソー教育思想の再検討

—「ペトラルカの受容者ルソー」

という観点から—

室井麗子

はじめに

本稿は、「ペトラルカの受容者ルソー」という視点からルソー (J.-J. Rousseau, 1712-1778) の教育思想を再考することによって、その多義性あるいは重層的構造の解明を目指すものである。

従来、ルソーの教育思想は、「近代教育思想」という枠組みを前提に、この枠内のどこにルソーを位置づけるかという関心から研究が展開されてきた。しかし、このような手法は動態的で重層性・多義性を孕むルソーの教育思想を靜態的な理解に留めてきた。本稿では、従来の研究とは異なる分析枠組みのもと、とりわけこれまでそのルソーに対する影響が指摘されながらも、教育の領域ではほぼ顧みられることのなかったペトラルカ (Francesco Petrarca, 1304-1374) の思想を参照枠にして、ルソーの教育思想の動態的な解釈を試みる。

一 十八世紀フランスにおけるペトラルカ

— 受難から復活へ

後世におけるペトラルカの受容に関する研究はさほど多くはないが、包括的な研究がいくつかある。ここではまず、これらの先行研究を頼りに、特に十八世紀のフランスにおけるペトラルカの受容状況を確認しておきたい。

十四世紀以降、『俗語断片詩集 *Romans vulgaires fragmentals*』(『カンツォニエーレ *Canzoniere*』) の詩人としてある種的神話性を付与され、ペトラルカ主義者 *Petrarquiste* たちによる称賛を謳歌してきたペトラルカは、十六世紀に入るとその人気に翳りを見せ始める。とりわけ十七世紀後半のフランスにおいては、イタリアはかつての栄光を失い、イタリアの詩やオペラ等が人々の趣味を墮落させるものとして非難される中で、ペトラルカの詩もまた嘲笑の的となるのである。

このような流れは十八世紀前半においても継承されたが、十八世紀におけるペトラルカの主要な批判的受容者の一人となったのは、ヴォルテール (本名 *François Marie Arouet*, 1694-1778) であった。彼は、文学的というよりもむしろ歴史的興味からペトラルカを俎上に載せ、ペトラルカをヨーロッパの文芸史において最も優れた詩人の一人と見なす。彼は、「諸国民の風俗と精神について *Essai sur les moeurs et l'esprit*

des nations」におおつて、イタリア語がダンテ(Dante Alighieri, 1265-1321)ならびにペトラルカの筆の下、その表現力と優雅さを極めたと述べている。さらには、ペトラルカの著作のうちには古代の作家たちの著作に匹敵する力強さと、新しい時代の瑞々しい感性とを見出し、『俗語断片詩集』の一つの詩(ペトラルカがその隠遁生活の地であるヴォークリュューズに於てたオード)をフランス語に翻訳し、読者たちに紹介するのである。⁽³⁾

ただし、その一方で、ヴォルテールは、「私はペトラルカを好まない」とも明言し、いつも同じことを繰り返しくだらなことを優雅に描く能力しか持たないとして、後にペトラルカとその詩への嫌悪感を明示してもいた。⁽⁴⁾

しかしなお、興味深いことに、十八世紀中頃から始まるペトラルカの再評価に先鞭をつけたのもまたヴォルテールであった。イタリア語に精通していたヴォルテールは、先述のようにペトラルカの詩をフランス語に翻訳するのであるが、それは十八世紀後半さらには十九世紀においても高く評価されることとなり、かくして不本意ながら彼はペトラルカ復興への道を開くことになるのであった。⁽⁵⁾そしてヴォルテールが開いたこの道に合流し、十八世紀後半における本格的なペトラルカの再評価に最も貢献した人物がルソーであった。

十八世紀に本格的に開花する「小説 roman」という文学の

新たなジャンルは、その形式・内容をペトラルカの神話性および詩に求める。十八世紀後半から十九世紀前半にかけて、①神話的寓話への参照、②ペトラルカと『俗語断片詩集』(『カンツォニエーレ』)という後ろ盾、③ペトラルカ風の愛の構想、という3つの要素を備えた「ペトラルカ風小説」という一大ジャンルが形成され、ルソーの『ジュリ、あるいは新エロイズ Julie ou la Nouvelle Héloïse』(以下、『新エロイズ』)はこのジャンルの代表的な作品となったのであった。⁽⁶⁾

ルソーは、一七二八年から一七二九年にかけてトリノに、一七四三年から一七四四年にかけてヴェネチアに、二度イタリアに滞在しており、その際にイタリア語を習得している。イタリア語を習得したルソーはイタリア語の著作を夢中になつて読むのであるが、とりわけ夢中になったのがペトラルカの詩であった。彼はペトラルカの詩をもとにロマンスや二重唱を作曲し、何よりも、『俗語断片詩集』のソネット三三八をそのエピグラフとして冠し、加えて八つのソネットを引用した『新エロイズ』を創作するのである。主人公ジュリとサンブルーの叶わぬ愛を描くこの書簡体小説と『俗語断片詩集』とは、①この世では決して成就しない愛、②神への切望として現われるものを死によって永遠に神聖化する、③徳や英知によって自らの魂の不安に打ち勝とうとする虚しい努力、④人間の儂さに対する感受性、といった観点において顕著な類

似性を示しているのである。⁹⁾このような『新エロイーズ』は、十八世紀におけるベストセラーとなり、ペトラルカの復活に寄与するのであった。

以上ここまで、ペトラルカ受容に関する先行研究を手がかりに、受難から復活へという十八世紀フランスにおけるペトラルカの受容の軌跡をざっと辿りながら、ルソーが十八世紀におけるペトラルカの重要な受容者であったこと、彼の『新エロイーズ』がペトラルカや『俗語断片詩集』の復活に大いに貢献したことを確認してきた。ここまでで気づくことは、先行研究において粗上に載せられてきたのは、「詩人ペトラルカ」だったということである。しかし周知のとおりペトラルカは詩人であると同時に、ヒューマニストでもあったのである。

ルソーがヒューマニズム継承者であること、あるいはヒューマニストとしてのペトラルカの継承者であることは、ヒューマニズムの研究者によって指摘されている。¹⁰⁾では、ヒューマニスト・ペトラルカとルソーとをどのように繋げることができるのだろうか。これについては先行研究においては吟味されているとは言い難い。したがって、以下ではこの点について考察するが、先取的に述べると、ルソーとヒューマニスト・ペトラルカとの接続を明らかにすることによって、ルソーの教育思想の多義的かつ重層的構造が浮き彫りになるだ

ろう。

二 ペトラルカにおける自己実践——『孤独生活論』

ヒューマニストとしてのペトラルカの研究に取り組んできた近藤恒一によると、ペトラルカにとって何よりも知るべきは「自己自身」であった。この「自己自身を知る」はペトラルカにとって単なる研究題目ではなく、具体的に内省したり内面を分析するという「自己の実践」であり、それは「魂の世話」であった。加えて、この自己実践は、自己の内面のみならず、外部に向かつて目を開くことでもあり、「つまり、それぞれの具体的状況のなかで自己の位置を客観的に分析し、認識し、この客観的認識をふまえて、世界における自己のあるべき生や生きかたを自覚することでもあった」。ペトラルカにとつて「自己自身を知るとは、自己のうちに閉じこもることではなく、むしろ、自己のうちに深まるとともにまた世界へと深まることであつた」。¹¹⁾

このような自己の実践はルソーにおいても見出すことができるが、両者の重なりを明確にするために、私たちはここで、その分析のための一つの枠組みを提起したい。それは、「霊操（あるいは霊的訓練）exercises spirituels」という枠組みである。では「霊操」とは何か、まず確認しておきたい。

(一)「靈操」という自己実践

「靈操」とは、フランスの思想史研究者P・アドや、さらにはアドの影響のもと晩年のM・フーコーが、自らの議論の主に置いていたものである。アドによれば、「靈操」とは古代哲学においては「鍛錬」の実践として存在し、古代ラテンキリスト教あるいはイグナチウス・デ・ロヨラを経て今日の西洋においても生き続ける「生きるための訓練」である。

そもそも古代においては「哲学」とは、抽象的な理論的教育あるいはテクストの解釈というよりもむしろ「鍛錬(exercise)」であり、その実践者の存在を巻き込むいわば「生き様」そのものであったという。この哲学的実践がつまり「靈操」であり、それは「知の秩序」と同時に「自己と存在の秩序」の中に位置づけられ、私たちの生そのものを一変させることを目指すものであった。このような生の変容は「自己への立ち返りconversion」として現われる。すなわち、靈操の実践を通して、私たちは自己を世界や自然へと拡張しその秩序を踏破しながら知を獲得し、そして自己へと立ち返り、いわば「自己の拡張」と「自己への収縮」を繰り返すことで自己を変容させるのである。フーコーによれば、このような、自己を中心軸として、外部に拡張してはそこから自らを逸らし、そして再び自己へ立ち返る中で自己を変容してゆく、いわば螺旋運動を通して、私たちは自己と世界に対する「俯瞰的な視点」

を獲得する。この俯瞰的視点を通して、自己は世界を深く把握し、この世界の構成を司る神の理性がその本性や機能において人間理性と同じ種類であることを発見すると同時に、この世界において一つの点でしかなく様々な必然性に結びつけられながら生きている自己の存在とその場を見定め、そのことの合理性を理解し受け入れるのである。

ところでアドによれば、古代の人々、とりわけストア派にとつては、人間の苦しみや混乱の主な原因は「情念」であった。それゆえ、ストア派において靈操は何よりもまず「情念の治療法」として現われる。この治療の実践を通して、私たちは自らの情念をコントロールし、それによつて自己の存在様式を変容させ、本当の意味で生きることを訓練するのである。

ここまでの議論からまとめると、要するに靈操とは、拡張と立ち返りという自己の螺旋運動を通して自己の存在を変容させ、自己と世界に対する俯瞰的視点を獲得し、情念をコントロールし、かくして自覚を持つて自由に生きることを目指した訓練だったのである。自覚的に生きるとは、理性によって生命を与えられた世界ニコスモスの一部として自らを認めるために、個人性の限界を超えながら生きるということである。そして自由に生きるとは、私たちに依拠しないもの、私たちがから逃れるものへの欲望を放棄しながら生きるということ

とである。

このような靈操という枠組みに鑑みると、本節冒頭で見たペトラルカの自己実践はまさに靈操の実践と重なる。自己へ深まるとともに世界へと深まり、世界における自己の位置取りを分析した上で世界における自己のあるべき生き方を自覚する、というペトラルカの自己実践は、まさに靈操のそれである。さらには、ペトラルカは、その自己実践について記した『孤独生活論 *De Vita Solitaria*』の中で、私たちはその実践によっていかにして現世で自由に生き得るかを示しており、それは、靈操が目的とする人間の現世における生き方そのものである。そして興味深いことに、ルソーが同じような生き方をその教育論の一つの帰結として提示しているのである。

(二) ペトラルカ『孤独生活論』における自己実践

ペトラルカは、一三三七年の夏に南仏アヴィニオン近郊のヴォークリューズという村で「孤独生活」を始める。それ以降、パルマ、パドヴァ、ヴェネチア等での生活を挟みながら、計四回ヴォークリューズで「孤独生活」を送ることになる。従って、このようないわば「観想的な生活」と「活動的な生活」の繰り返しそのものがペトラルカの人生における自己実践を成しているのであるが、三度目の「孤独生活」の折に着手されたのが『孤独生活論』であった。ヴォークリューズが

位置する教区カヴァイヨンの司教、フィリップ・ド・カバツソーレへ宛てた書簡という形式で記されたこのテキストにおいて、ペトラルカは、都市から離れ孤独と余暇生活において文芸と親しむことを勧めつつも、しかしながら以下のようにも述べている。

しかし、都市に住む必要が生じた時には、私は人々の中であつての孤独を、嵐の真つ只中であつての避難場所を作り出すことを学んだのですが、それは、感知するものを感じないという感覚を制御するという、一般的にはあまり知られていない方法を用いることによつてでした。独自の実験によつて習慣にまでそれを高めてからずつと後になつて、その方法は、あるとても聡明で教養のある作家の助言でもあるということを見出してからというもの、私はその方法を前よりも一層熱心に記憶に刻み込みました。というのも、その古代の権威によつて私の実践が支持されているという発見で嬉しくなつたからです。

この、いかなる状況下にあつても自己に専念し自らの内に孤独と避難所を作り出し、ひいては自由でいられる、という主題を、ペトラルカはある「古代の権威」すなわちクインテリアヌスの『弁論家の教育』の中に見出し歓喜するのであ

るが、私たちもまた、同様の主題を、ルソーの教育論『エミールあるいは教育について *Emile, ou de l'éducation*』(以下、『エミール』)の続編とされる『エミールとソフィあるいは孤独に生きる人たち *Emile et Sophie, ou Les Solitaires*』(以下、『エミールとソフィ』)において見出すのである。

三 ルソーにおける自己実践——『エミール』と『エミールとソフィ』

(一) 霊操のテキストとしての『エミール』
『エミール』は、周知のように、一人の子どもが、誕生の瞬間から結婚するまでの間、一人の教師によって教育され形成されていく過程を描いたテキストである。この過程において一貫して導き糸となるのは、「人間の存在をその自己の内部へ閉じ込め、そして、自然が万物の連鎖の中で人間に割り当てた位置に留まること」という基本原則である。この原則を遵守することで、ルソーの人間形成論が目的とする「自然な人間」(欲望と能力とが限りなく均衡に近い状態にある幸福な人間)が実現されるのである。

このような観点から『エミール』を見てみると、幼年期(第一―第三編)においては、人間をいかに自己の内部へ留めておくかに配慮しながら教育が展開され、青年期(第四―第五

編)においては、万物の連鎖の中での然るべき自己の位置をいかに認識させ、そこへいかに立ち戻らせるかに配慮しながら教育が展開されていることがわかる⁽²⁾。換言すれば、幼年期の教育は自己への「収縮」をを目指すのに対して、青年期以降の教育は、自己の外部への「拡張」を経て再び自己へ立ち返るといふ、「拡張」と「収縮」の連続運動によって展開されるのである。これは、先に確認した霊操における自己の運動そのものである。このような自己の動きこそが、本稿において『エミール』を霊操のテキストだと見なす所以である。そして『エミール』の続編『エミールとソフィ』は、そのような霊操の実践の一つの帰結を示していると考えられるのである。

(二) 霊操の一つの帰結としての『エミールとソフィ』
『エミールとソフィ』は、上に述べたように『エミール』の続編とされる未刊の著作である。このテキストは、成人となつたエミール自身がかつての師に宛ててしたためた二通の書簡によって構成されている。したがって、このテキストの語り手はエミール自身であり、師と別れた後、彼が経験する数々の不幸の物語が、彼自身の回顧として語られる。エミールは、自らに次々と降りかかる不幸のさなか、かつて受けた教育に照らして、常に自らを検討する。それは、自らが受けた

教育を現在の自己に重ね合わせ検討する中で、エミール自身が、それを自分なりに意味づけしていく作業でもある。この作業を通して、師の教育がどのような人間を形成したのかが語られることになる。では、エミールはどのような人間として形成されたのか。換言すれば、『エミール』における靈操ほどのような（一つの）帰結を迎えるのか。それがもつとも顕著に示されているのが「奴隷状態における自由と幸福」である。

愛すべき人々の死後、エミールとソフィはパリへ移住する。しかし、そこでソフィはある男に騙され、その男の子どもを身籠もってしまう。そのことをソフィから告白されたエミールは、彼女のもとを離れ、孤独の流浪に身を委ねる。そのさなか、彼の乗った船がバルバリアの船に襲われ、エミールは奴隷の身となるのである。奴隷状態におかれたエミールは、自分自身を省みて、自らにある種の満足感を抱く。それは、人間がいかなる軛を自らに課そうとも、自然の奴隷である自分分は、いかなる自由も奪われないのだ、という実感から生じたものであった。「奴隷であったときこそ、己が御代だった、己は蛮人の鎖につながれていたときほど、己が身に対して大きな力を持ったことはなかった」とエミールは述べる。つまり、かつては教師によって実現されていた、エミールの自然への従属と自己への専念が、奴隷状態におかれることによつ

て初めて自覚的に、彼自身によって実現されることになるのである。

このように「奴隷状態においても自らは自由で幸福である」と自覚するエミールは、自らの内に「人々の中にあつての孤独を、嵐の真つ只中にあつての避難所を作り出すことを学んだ」という『孤独生活論』におけるペトラルカと重なる。この苦難に満ちた現世においてもなお、私たちはいかにして自己自身として自由に世界における自らのあるべき生き方を追求しうるのか。ペトラルカ、ルソーは共にそのための自己実践を提示したのであった。本稿で試みたように、靈操という自己実践によって照射してみると、『新エロイズ』における詩人ペトラルカだけでなく、『エミール』や『エミールとソフィ』においてもヒューマニスト・ペトラルカの痕跡を見出すことができるのである。

おわりに

以上のように、靈操という枠組みにおいて、ペトラルカ『孤独生活論』と接続させて検討すると、例えば、『エミール』をルソーの政治的著作と関連させ、「人間の教育」と「市民の教育」とを連続的にとらえることで抽出されるエミールとは異なるエミールが、私たちの前に立ち現れる。『エミールとソフ

「イ」の『エミール』は、市民として社会変革へ向かうというよりも、むしろ、自らの内に自由のための孤独と避難所を作り出そうとする『孤独生活論』のペトラルカのように、いかなる社会状況におかれても、自己のみに集中し続け、自らの主人であり続け、自由と幸福を実感できるような人間である。

このような人間としてエミールを描く『エミールとソニー』から『エミール』を逆照射するとき、「市民として社会変革へ向かう人間を形成する」という従来指摘されてきた意義とは異なる『エミール』の意義を私たちは見出すのである。そもそもルソー自身、自らの教育思想を、非常に多義的なものとして構想していたのではないだろうか。今後は、ルソーの教育思想の一つの解釈の正当性を主張するというよりも、むしろ、彼の構想の多義性ならびに重層的構造の解明作業が必要となるであろう。

注

(1) 本稿では言及しなかったペトラルカ受容の包括的な研究として、下記のものがあろう。

・ *Pétrarque en Europe XIVe-XXe siècle*, Actes du XXVI^e congrès international du CEFIL, Turin et Chambéry, 11-15 décembre 1995, Études réunies et

publiées par P.Blanc, Honoré Champion, 2001.

この共同研究では、十四世紀から二十世紀にかけての様々な文化圏や領域におけるペトラルカの受容について検討がなされている。

(2) F.J.L.Mouret, *Pétrarque dans les ouvrages de langue française publiés en Europe au XVIII^e siècle, Néhelicon*, Paris, 1973, pp.305-307; E.Duperray, *L'Or des Mots : une lecture de Pétrarque et mythe littéraire de Vauclose des origines à l'orée de XXe siècle : histoire de pétrarquisme en France*, Publications de la Sorbonne, 1997, pp.15-18.

(3) *Voltaire, Essai sur les mœurs et l'esprit des nations et sur les principaux faits de l'histoire depuis Charlemagne jusqu'à Louis XIII*, Introduction, bibliographie, relevé de variants, notes et index par R.Pomeau, Garnier, 1963, pp.763-765.

(4) C.Cherpach, *Voltaire's Criticism of Petrarch*, *The Romantic Review*, New York, avril 1955, vol.XLVI, pp.101-107; F.J.Mouret, *ibid.*, pp.312-313; Duperray, *ibid.*, pp.184-185.

(5) Duperray, *ibid.*, p.184; F.J.Mouret, *ibid.*, p.313. なお、この十八世紀以前におけるペトラルカ受容については、一六六九年に刊行

- された Placide Catanausi による翻訳だが、ペトラルカの詩の唯一のフランス語訳であった。この翻訳は、一七〇七年に再版された際にはさほど関心を引くことはなかったが、一七五〇年代にはペトラルカ復興の気運の高まりに寄与するようになった。F.J.Mouret, *ibid.*, pp.311-312, Duperray, *ibid.*, p.186.
- (9) Duperray, *ibid.*, pp.109-110.
- (7) *ibid.*, pp.185-186.
- (8) Rousseau, *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, éd. H.Coulet, L.Gallimard, 1993, p.67.
・三三八ソネット
- 「死よ 世の日輪を奪い 冷たく／暗い大地と化し、
愛の武装を解き 盲となし／優雅を裸にし 美を病めるものとし、／失意のわれに 重き荷を背負わせた。
お前は、礼讓を追放し、純心を奈落に追いやる。／
一人の嘆きならざるに 独り悲しむ、／お前は 美德に映える芽をむしり／第一の尊きを奪う、／ああ 第二に従うものあろうや？」
- 風は 大地は 海原は 来るべき人類の／血統のために
に 惜しみなく涙するや、佳き人を失いて／あたかも野
辺に花なく 指輪に宝石なきさま。
- 在りし日 世界はかのひとを知らず 知るは／ただわ
- れ 地に泣き伏すわれひとり、／今し蒼空は わが涙ゆ
えに 晴れ渡る。」(ペトラルカ『カンツォニエーレ—
俗事詩片—』、池田廉訳、名古屋大学出版会、一九九二
年、五二二頁)
- (9) P.A.Berselli, Influences italiennes sur *La Nouvelle Héloïse*, *Annales de la société J.-J.Rousseau*, t.LXXXII, 1950-1952, pp.155-165; Duperray, *ibid.*, pp.110-112.
- ルノー『新エロイーズ』における『俗語断片詩集』の
影響を論じた々の他の研究としては、M.Launay,
Rousseau traducteur et utilisateur de Pétrarque dans
La Nouvelle Héloïse, *Index des mélanges littéraires,
contes et opuscules de J.-J.Rousseau*, Slatine, 1984;
P.Coleman, Aggression and Inwardness in Rousseau's
Julie, *Reparative realism : mourning and modernity
in the french novel 1730-1830*, Droz, 1998; J.von.
Stackelberg, Du paysage de l'amour au paysage de
l'âme, *Vérité et littérature au XVIIIe siècle : Mélanges
rassembles en l'honneur de Raymond Trousson*,
Honoré Champion, 2001, p.51°.
- (10) E・ガレン『ルネサンスの教育』、近藤恒一訳、知泉書
館、二〇〇二年。近藤恒一『ペトラルカと対話文学』、
創文社、一九九七年。

- (11) 近藤恒一『新版・ペトルカ研究』、知泉書館、二〇一〇年、二四二―二四五頁。
- (12) 晩年のフーコーが、主として「靈操」を論じている文献としては下記のものが挙げられる。
- ・ M.Foucault, *L'Herméneutique du Sujet: Cours au Collège de France. 1981-1982*, Gallimard/Seuil, Paris, 2001. (M・フーコー『主体の解釈学』ロマンティク・ム・フランス講義 1981-1982年度) (ミシェル・フーコー講義集成 11)、廣瀬浩司、原和之訳、筑摩書房、二〇〇四年)
 - ・ M.Foucault, *L'éthique du souci de soi comme pratique de la liberté. Dit et Ecrits II: 1976-1988*, Gallimard, 2001, pp.1527-1548. (『自由の実践としての自己への配慮』廣瀬浩司訳、『ミシェル・フーコー思考集成 X―倫理／道徳／啓蒙―』、小林康夫他編、筑摩書房、二〇〇二年、二二八―二四六頁)
 - ・ M.Foucault, *Vérité, pouvoir et soi, *ibid.**, pp.1596-1602. (『真理、権力、自己』、原和之訳、同書、三〇七―三一四頁)
 - ・ M.Foucault, *Les techniques de soi, *ibid.**, pp.1602-1632. (『自己の技法』、大西雅一郎訳、同書、三一六―三三三頁)
- (13) P.Hadot, *Exercices spirituels et philosophie antique*, édition augmentée, Albin Michel, 2002, pp.13-25.
- (14) M.Foucault [2001], *op.cit.*, p.199. (邦訳「前掲書」二四四頁)
- (15) P.Hadot, *Epistrophe et Metanoia dans l'histoire de la philosophie. Actes du XIème congrès international de Philosophie*, Bruxelles, 20-26 août 1953, Louvain-Amsterdam, Nauwelaerts, 1953, vol.XII, p.31.
- (16) M.Foucault [2001], *op.cit.*, pp.250-275. (邦訳「前掲書」三〇三―三三三頁)
- フーコーはこの点について、セネカの『自然研究』を吟味しながら説明している。フーコーによると、広大な世界を踏破することのテクストは、自己(＝主体)の上昇運動と下降運動を再構成するように組み立てられているという。その構成をみると、第一巻では空中の火(流星など)や光や虹について、第二巻では空気や雷光について、第三巻では陸地の水について、第四巻ではナイル川と雲について、第五巻では風について、第六巻では地震について、第七巻では彗星について、それぞれ論じられる(セネカ『自然研究』(セネカ哲学全集三・四)、土屋陸廣訳、岩波書店、二〇〇五―二〇〇六年)。フーコーによると、これは要するに、自己が上昇と下降を繰り返

しながら世界を踏破し、その頂点へと向かうように構成されているのである。この運動を通じて世界（＝自然）を踏破した自己は、その合理性のシステムを理解するに至る。こうして世界の頂点（つまり神が世界を見ている地点）にたどり着いたとき、自己は世界への、さらには自己への俯瞰的な視点を獲得するのである。

(17) P.Hadot [2002], *op. cit.*, pp.22-38.

(18) 近藤 [二〇一〇年]「前掲書」。

(19) J.Zeitlin, Preface, *The Life of Solitude by Francis Petrarch*, translated by J.Zeitlin, University of Illinois Press, 1924, pp.15-16.

(20) *ibid.*, pp.135-136.

(21) Rousseau, Emile, *Oeuvres complètes de J.-J.Rousseau*, t.IV, édition publiée sous la direction de B.Gagnebin et M.Raymond, Bibliothèque de la Pléiade (以て O.C., t.IV), pp.245-488. (邦訳『エミール』『ルソー全集』第六卷、樋口謹一訳、白水社、一九八〇年、一七二—二八二頁)なお、本文中の引用については、邦訳書を使用させていただきます。

(22) *ibid.*, pp.489-868. (邦訳、同書、第六卷、二八三—三六一頁、『ルソー全集』第七卷、樋口謹一訳、白水社、一九八二年、一一—三三七頁)

(23) Rousseau, *Emile et Sophie, ou Les Solitaires*, O.C., t.IV, *ibid.*, pp.916-917. (邦訳『エミールとソフィーまたは孤独に生きる人たち』、『ルソー全集』第八卷、戸部松実訳、白水社、一九七九年、五一八—五二九頁)

(24) 『エミールとソフィー』におけるエミールの「奴隷状態における自由と幸福」には、ストア派の影響も色濃く反映されている。この点については、室井麗子「ルソーにおける「死の訓練」について—セネカの「霊操」を手がかりに—」(『教育哲学研究』、第九七号、二〇〇八年)を参照されたい(なお、本稿の第三節は、この論文の一部を再構成したものである)。